



A window of a poem

# ポエムの窓

解説・高安義郎

## 生きる

篠崎康文

酒も煙草ものまず

女も賭博にも手をださず

泣きごとといわず生きてきた

旅や旅行にもでず

レストランにも食堂にも行かず

泣きごとといわず生きてきた

友人の葬儀や結婚式にもでず

何一つ趣味ももたず

泣きごとといわず生きてきた

交通事故にあい 何の補償もなく

何度も何度も病院に入院し

泣きごとといわず生きてきた

金も財産もなく 人から変わり者といわれ

社会から遠くはなれ いつも孤独で

泣きごとといわず生きてきた

下卑な女に莫迦にされ

近隣の人に無視され

泣きごとといわず生きてきた

生きる本能の欲望が枯れ

無能力者として扱われ

それでも 泣きごとといわず生きてきた

兄弟からも見放され

八方ふさがりに苦悶し

狂人とのしられ途方にくれた

生きる道を遮断され

毎日が地獄の冥府になり

ただ おろおろと日をおくる

自ら敗北を黙認し

破綻者として生きる力をうしない

とうとう死の淵をさまよった

一寸先は闇となり

ぼろきれになって遮二無二に走り

防波堤と崖から身を投げかける

忘我の身投げを卒然と

見知らぬ者に殴り救われ

はったとこの世に取り残された

以来生きることのみ

生の軋みをかみしめて

ひそかに文字を綴る

世に無駄なものなし

(平成九年七月二五日)

この作品の作者は篠崎康文という、才能あふれる芸術家で、私の古い友人の一人です。ですが残念なことに、彼は十五年ほど前に病没しました。彼は大学を出てすぐに、さる信用金庫の社員となりましたが、若い頃から描き続けてきた絵画の世界に身を置く決心をし、会社を辞め、絵を描くことに没頭し始めました。

そうして描いた作品は種々の展覧会で幾つもの賞を取り、彗星のように現れた天才画家として取り上げられたこともあり、もてはやされたこともありましたが、

ですが、芸術とは何なのでしょう。才能あふれる作品を描いているにもかかわらず、彼の絵はほとんど売れず、やがて、その日の生活にも事欠くようになりなりました。

その頃詩に興味を持ち始めたように、私の詩の師匠である荒川法勝先生を頼り、私達の同人となりました。

私たちの同人雑誌『玄』はそのころ年二冊ほど同人誌を発行しておりましたが、表紙絵を彼に依頼することになりました。

その後十年ほどの間に篠崎氏は他界され、師匠の荒川先生も亡くなられてしまいました。その後、同人数が少なくなりながらも続ける同人会『玄』の雑誌には、今も篠崎氏の差し絵を使わせていただいています。

晩年氏は、千葉県の某病院に長く入院されていました。私は何度かお見舞い

に行かせてもらいましたが、彼はとても喜んでくださり、枕元に置いてあった数冊のスケッチブックと、詩作品や随筆を記した大学ノート数冊を私に託されました。

本日ここに紹介させていただいた詩は、その大学ノートの最初に記されていた作品です。

この作品には、芸術で身を立てようとして思うように行かなくなった人間の、典型的な人生が記されているように思え、私は胸が締め付けられる思いで取り上げました。

私も若い頃、文筆一本で生きることが考えたことがありましたが、私の師匠は、「芸術で生きることがリスクの多い賭のようなものだ。それは才能のあるなしとは関係がない」と諭され、私は師匠と同じ高校の教員になり、何とか世間並みの生活を送ることができたのですが、世の中には、この大きな賭に打って出る芸術家の卵が沢山いるようです。実際世に名を残し成功した作家や芸術家の多くは、幸運に恵まれて賭に勝利した人たちです。しかし、おそらくその数百倍、数千倍の卵達は、この詩の作者のように才能を誰にも知られることなく、理解されず名前すら埋もれてしまっているのです。

私も彼のように無一文で寂しい人生を送っていたかもしれないことを思うと、この作品は人ごとのようには思えず、紹介することにいたしました。

